

アナトリアの山の上で

足立 潔史

アンカラ空港でレンタカーを借りて東へと走り始めた。6年前にここを走ったのは5月の初めの頃で、春の遅いこの地方ではようやく畑を耕し始めていた。今暑い夏の夕日に照らし出された畑には、ひまわりが重い頭を垂れて延々と続いている。畑の間に散在する農家は以前に比べるとずっと豊かになったように見える。道路も前より走りやすくなったようだ。

アンカラから北東に約100Km行った標高800mの高原にチャンクルという町がある。人口2万人ほどの小さな商業都市だが、このあたりでは中心的な町となっている。市内をぐるっと車で回ると予約をしておいたホテルはすぐに分かった。部屋は西日が差し込んでいて暑かった。このあたりでは暖房は必需品だが冷房の準備はない。ホテルはガランとして人気がなかったのでドアを開け放して風を通しながら、荷物を解いて明日持っていく器材の準備をした。

妻は運転の疲れか部屋の暑さも気かけずに昼寝を始めてしまった。なにしろ地図を見させても見方が分からないので、二人で旅に出る時はいつも妻が運転役で私が地図見役と決まっているのだ。8時過ぎに西日が山の端に隠れるとようやく部屋は涼しくなってきた。

11時過ぎに部屋の電話が鳴った。若い女性の声だった。たどたどしい英語でメスット家のものだと言った。6年前黒海沿岸の町アマスラから、香料のサフランの名の由来となった町サフランボルへと車を走らせていた時に知り合った家族である。お父さんとお母さんと小学生の男の子が三人、それと従妹の10歳位の女の子と、サフランボルの町角で手を握って一緒に撮った写真がある。それから6年、皆既日食を見るために再びトルコに行く機会ができた。一緒に皆既日食を見ようと誘ってあった。残念ながら家族の都合がつかないので日食は見に行かれない、そのかわりサフランボルまで会いに来てもらえないかという若い女性の誘いである。今回は日食もさることながら、トルコでメスット家に再会することが最大の目的だった。観測予定地からサフランボルまで250Kmはある。でもなんとか行こうと約束した。

ホテルの食堂はガランとしていた。このあたりの建設現場に出張してきたとおぼしき技師風の現地人二人がそそくさと朝食をすますと仕事へ出ていった。我々も朝食をすますと、車に器材を積み、観測地の下見に出発した。高原の朝は黒ずむほどに良く晴れた青空で、空気も気持ちよくひんやりとしていた。

チャンクルは皆既帯の外にあり、食中心線までは約150Km北東へ移動しなければならない。北へ50Km走ったところで高原が終り、遙か下に広く開けた谷間を見下ろすところへやってきた。見覚えのある風景だ。東西に走る北アナトリア大断層に沿って形成された谷間で、谷間の向こう側には1500mから2000mの山並みが続く北アナトリア山地が続いている。

谷間の道を今度は東へ向けて走る。皆既の中心線上にカルギという小さな町がある。日食地図上でカストモ又とオスマンシクの間ぐらいのところ、カストモ又とは北アナトリア山地で

隔てられている。

カルギの町の後ろには特徴のある大きな岩山がアナトリア山地から飛び出してそびえている。谷間は日が高くなるにつれて霞がかかってきていた。どこか山に登る道はないだろうか。石ころだらけの道を車で30分ほど登ると、視界が開けて標高1500m位の高原に出た。あたりは高原の牧場として開拓されているらしく、うねうねと広がる牧草地のところどころに赤い屋根の人家がいくつか見える。さっき走ってきた谷間が一望に見渡せて、町も特徴のある岩山もはるか下に見下ろせた。上方の視界は遮るものがない。絶好の観測地だ。

車を牧草地の縁に停めて地図を広げ方位の確認などをしていると、背後の森の中から小脇に籠を抱えた若い女性が現れた。森の中できのこを摘んで帰ってきたようだった。小柄で利発そうな顔立ちをした人だった。お互いに言葉が通じない会話ながら、我々は明日ここで日食の観測をやるつもりだというと、それなら私の家に来い、家はこのすぐ先だからというのである。早速言葉に甘えて車を牧場の真ん中の彼女の家の前まで進めた。そこは本家だとか分家だとか納屋とか車庫とかで数軒の集落になっていて、その前に広場があって牧場が一望に見渡せた。

私が器材のセットを試している間、妻は集まってきた男の子や女の子、お兄さんやお姉さん、おじさんやおばさん、犬や猫やの名前まで聞き出して、歳はいくつだとか言葉が全然通じないのに平気で話しをしていた。牧場には牛の群れがいて羊の群れがいて、馬がいて鶏がいて、小鳥がさえずっていて、日食をむかえるための舞台装置は完璧だった。

ここからサフランボルまで250Kmを走らなくてはならない。観測地の下見を早々に切り上げて、明日またと高原の牧場をあとにした。

午後の日を正面に受けてサフランボルへの250Kmはつらいドライブだった。それでもそんな疲れはメスット家の人々と再会した喜びで吹き飛んでしまった。なんと男の子三人兄弟だと思っていた家族は、上二人は女の子で19歳と17歳の美しい娘に変身していた。説明を受けてもには信じがたく、思わず6年間大事にしてきた写真と目の前の娘達とを何度も見比べてしまった。

帰りの250Kmは再会の感動に酔いしれたまま、真っ暗な高原の道を走った。行き交う車もまるで、満天の星空を一人占めにしてのドライブは宇宙飛行のようだった。

高原の牧場は昨日と同じようにのったりとしていた。我々をここに案内してくれたハートンという名の若い女性は、今日はこころなしかおめかしをして我々を迎えてくれた。

昨日は30分も日を浴びていると真っ赤に日焼けしたのに、今日は山の端から雲が湧き出して流れては消えていき、時折太陽をすっぽり包んでしまうこともあった。風は微風ながら風向が定まらない。いやな予感がした。皆既の2分半だけでも晴れ間であればよいのだが。

牧場の人たちは三々五々仕事の手を休めては私のそばに来て見物をしていった。妻はいかにも分かった専門家のように、日食の絵を書いたり、ピンホールや日食グラスを使って食分状況を説明したりしていた。みんな頷いているところをみると話は通じているようだった。

食が進むにつれて雲の量が増えて太陽を隠してしまう時間が長くなった。それでも第二接触は

薄雲をとうして見る事が出来た。プロミネンスが大きく吹き出して、コロナが実に活弁な様相で広がっているのが見えた。食甚に至る前に厚い雲の塊が太陽を覆ってしまい、第三接触が終わって本影が谷間の向こうに走り去っても、日の光は戻らなかった。

ハートンは手作りのパンやヨーグルトにお茶を添えて我々をもてなしてくれた。日の光が戻った午後の高原牧場は、なごやかなピクニックの場となった。みんなで記念写真を撮った。みんな楽しそうだった。日食はまた見る機会があるけれど、この山の上の人たちには二度と会うことがないだろう。出会いの感動の余韻が消えないまま山を下りた。振り返ると山の上の牧場に赤い屋根の家が小さくなって見えた。

